

合、気を使うべきだという。実際問題として、調査員と回答者との人種関係を事前に管理することは至難のわざに属する。厳密に、このバイアスを排除しようというのなら、調査員がインタビューする前に、あらかじめ回答者の人種をしらべなくてはならないと匙を投じている。

### (調査員の人種の影響)

#### — エスニック・マイノリティとの関係 —

アメリカは人種の坩堝と言われる。黒人・白人の2分法で分割される白人のなかでもWASPと呼ばれるアングロサクソン系ピューリタンの本流とそれ以外の非WASPとがある。また、黒人・白人以外にアメリカ原住民や中国人など少数民族もいる。

調査員と回答者との人種関係を黒人・白人の関係でしらべた文献は前述の調査をはじめとして割合あるが、黒人以外のエスニック・マイノリティ(少数民族)との相互関係をしらべたものはあまりない。そこでミハエル・ウィークスとポール・モールが1975年に行った調査を1981年<sup>(\*)5</sup>に発表しているのを紹介しよう。

調査は4地域、1472人の小学生で、学区の教育委員会名簿より該当人種を抽出した。抽出人種はキューバ人、メキシコ系アメリカ人、アメリカ原住民、中国人の4種で地域はそれぞれマイアミ(キューバ人)、エルパソ(メキシコ系)、アリゾナ(原住民)、サンフランシスコ(中国人)である。抽出に際しては1/2を英語を話す子ども、1/2を英語を話さない子どもにしたが、その判定は教育委員会に従った。調査員(101人)は50人の該当人種と51人の非該当人種、後者は若干調査経歴に優るが、全員3日間の調査訓練を実施した。さらに、全サンプルの15パーセントについては、インタビューに同行して観察、全サン

ルの10パーセントは調査終了後監査をおこない精度の均質に留意した。

調査内容は英語能力に関することである。調査手順は、まず対象児のいる世帯から、世帯の事情を知っている14歳以上の世帯員を対象児の代理として選定してもらい、面接法により世帯のバックグラウンドを調査した。調査項目は世帯での使用言語や英語会話能力、アメリカ移民の時期など10問からなり、その結果は英語能力(教育委員会が判定した評価)との相関が高く、英語能力の予測に有効とされたものを使用している。世帯調査(バックグラウンド調査)が終ってから、ひきつづき対象児にたいし英語能力のペーパーテストを実施した。ペーパーテストの質問は英語で印刷されている。テストの指示は英語だが、必要な場合は通訳した。ただし、質問文は通訳しない。

実験の狙いは、エスニック調査員とノン・エスニック調査員とで、バックグラウンド調査とペーパーテストとの結果がちがうのではないかという仮説である。バックグラウンド調査とペーパーテストによる英語能力スコアとは、従来、相関の高いことが分っており、調査員バイアスがなければ結果は一致するはずである。しかし、エスニック調査員が同じエスニック世帯を訪問する場合のフランクな調査場面とノン・エスニック調査員の調査場面とは微妙なちがいがあはしないかということであろう。ところが、結果は人種による調査員バイアスがまったくなかったのである。

アメリカ移民にとってアメリカ人になるということは、英語をおぼえることであった。英語をおぼえ、アメリカンウェイオブライフを身につけることであった。英語がよく話せないということはアメリカ人として失格することであった。このような重大な意味をもつ英語能力については、エスニック・マイノリティの人は何らかのコン

プレックスがあるかも知れない。ということから出発したこの実験は、仮説が検証できなかった。最近のアメリカは、エスニックの実態に即して、*bi-linguistics* つまり英語と母国語の2カ国語を初等教育で教える方向になってきている。「人種の坩堝」の考え方は、今や*myth*(神話)になっているという考えもある。*myth*は架空の話という意味もあり、多様な民族性を肯定する考えが強まっている。このような風潮が背景となって、この結果が生じたのかも知れないと思う。ともあれ、興味ある実験である。

### (調査完了に明るい見とおしをもつ 調査員の回収率は良い)

われわれの経験では、むつかしい調査の場合、質問票の中身をみて恐れをなし、出かけるのをためらうような気の弱い調査員は、多くは途中で放棄するか低い回収率で帰ってくる。一方、対象者の調査協力説得に自信のある、活発な調査員は、多くは高回収率で堂々と帰ってくる。このように、対象者の回答協力への調査員の期待感と実際の回収率とのあいだには、強い関係があるようだ。

この点に関して、電話調査で実験した例<sup>(\*)6</sup>(1983年発表)がある。研究者はエレアノール・スインガー(社会科学センター主任研究員)、マーチン・フランケル(バルーチ大学統計学教授)、マルク・グラスマン(統計コンサルタント:ニューヨーク市在住)の3人である。調査機関はNORC(*National Opinion Research Center*)。調査員35人の8割は1年以内の調査経験又は未経験者であり、また、調査員の8割は黒人であった。調査項目は一般的な余暇活動につづき、心情的幸福感、精神衛生、飲酒、マリファナ使用、性行動その他属性として収入をきいた。完了は1,100(サンプル数の記載なし)。

調査に入る前に、調査員は調査の難易についての予想を評価した。対象世帯から対象者を選定する作業の難易度、調査協力説得の難易度、質問の各項目についての無回答率などを事前に見込んでもらった。

その結果判明した点は次のとおりである。

- ① 調査員の属性との関係では、高年齢調査員ほど対象の協力度が高く、スクリーニングや回収率の成績が良い。これは、加齢に伴う特質として、自信のようなものが声の調子ににじみ出てきて、回答者を安心させるのであろう。
- ② 調査員の調査経験との関係はほとんどない。まったくの未経験者よりは1度でも2度でも経験のある人の方が成績が良いとは言えるが、経験が深まったからといって成績が良くなることはない。
- ③ 調査員への割当を多くすると、スクリーニングや回収率が悪くなる。仕事が増えたことによる調査員の士気低下が原因なのか、困難な例がとくに混入したためなのかは分らない。
- ④ スクリーニングや回収率で悲観的な予想をした調査員は、楽観的な評価をした人よりも成績が良くない。自信のない調査員の回収率は低く、自信のある調査員の回収率は高い。調査票に対する調査員の態度が、調査票そのものよりも、回収率に影響をあたえるということを示唆している。
- ⑤ 上記の諸点については、面接調査の事例で調査したサドマン(1977)やシンガー(1979、1982)らの先行研究があるが、傾向は大体一致している。しかし、各質問についての無回答率と調査員の事前予想との関係はなく、調査員の属性との関係もみられなかった。この点は先行研究と異なる。  
この研究で少し気になるのは、NORCのよう

な一流調査機関を使用しながら、何故35人の電話調査員の構成を、8割が黒人、8割が1年以内の調査経験という新人編成にしたのかということである。個人面接の場合でしらべたサドマンやシンガーの先行研究の追試実験を同じ調査機関NORCを使ってやるのなら、調査員の条件を先行研究に合わせて、白人女性中心の経験者で揃えるべきではなかったか。敢て勤めるならば、Face-to-Faceでなく、回答者の顔色を気にしなくてもよい電話インタビューの場面で調査員バイアスを発揮させるには、黒人の新人調査員の方が仮説データが出やすいと研究者が判断したのではないかなどと疑いたくなる。調査員の条件を大体同じにしな

ければ、電話調査でも同様の調査員バイアスがあるとは断言できないのではないか。一步譲って、調査員構成は問題がなかったとしても、先行研究は70人の調査員、今回は1/2の35人であるのが気にかかる。一般に、電話調査員の問題点として指摘されていることは、動員調査員の少ないことによるバイアスの問題である。動員調査員が少なければ少ないほど1人当たり受持サンプルが多くなり、調査員によるバイアスは何倍にも増幅される可能性がある。このような欠点はあるが、調査員のパーソナリティが調査の質に影響をあたえるという結果は注目すべき指摘であるように思う。

\* 1 Edward Blair

1980 "Using Practice Interviews to Predict Interviewer Behaviors"  
*Public Opinion Quarterly* 1980 (vol. 44-2)

\* 2 Arpad Barath Charles F. Cannell

1976 "Effect of Interviewer's Voice Intonation"  
*Public Opinion Quarterly* 1976 (vol. 40-3)

\* 3 Edward Blair

1977 "More on the Effects of Interviewer's Voice Intonation"  
*Public Opinion Quarterly* 1977 (vol. 41-4)

\* 4 Patrick R. Cotter, Jeffrey Cohen, and Philip B. Coulter

1982 "Race-of-Interviewer Effects in Telephone Interviews"  
*Public Opinion Quarterly* 1982 (vol. 46-2)

\* 5 Michael F. Weeks and R. Paul Moore

1981 "Ethnicity-of-Interviewer Effects on Ethnic Respondents"  
*Public Opinion Quarterly* 1981 (vol. 45-2)

\* 6 Eleanor Singer, Martin R. Frankel, and Marc B. Glassman

1983 "The Effect of Interviewer Characteristics and Expectations on Response"  
*Public Opinion Quarterly* 1983 (vol. 47-1)

な一流調査機関を使用しながら、何故35人の電話調査員の構成を、8割が黒人、8割が1年以内の調査経験という新人編成にしたのかということである。個人面接の場合でしらべたサドマンやシンガーの先行研究の追試実験を同じ調査機関NORCを使ってやるのなら、調査員の条件を先行研究に合わせて、白人女性中心の経験者で揃えるべきではなかったか。敢て勤めるならば、Face-to-Faceでなく、回答者の顔色を気にしなくてもよい電話インタビューの場面で調査員バイアスを発揮させるには、黒人の新人調査員の方が仮説データが出やすいと研究者が判断したのではないかなどと疑いたくなる。調査員の条件を大体同じにしな

ければ、電話調査でも同様の調査員バイアスがあるとは断言できないのではないか。一步譲って、調査員構成は問題がなかったとしても、先行研究は70人の調査員、今回は1/2の35人であるのが気にかかる。一般に、電話調査員の問題点として指摘されていることは、動員調査員の少ないことによるバイアスの問題である。動員調査員が少なければ少ないほど1人当たり受持サンプルが多くなり、調査員によるバイアスは何倍にも増幅される可能性がある。このような欠点はあるが、調査員のパーソナリティが調査の質に影響をあたえるという結果は注目すべき指摘であるように思う。

\* 1 Edward Blair

1980 "Using Practice Interviews to Predict Interviewer Behaviors"  
*Public Opinion Quarterly* 1980 (vol. 44-2)

\* 2 Arpad Barath Charles F. Cannell

1976 "Effect of Interviewer's Voice Intonation"  
*Public Opinion Quarterly* 1976 (vol. 40-3)

\* 3 Edward Blair

1977 "More on the Effects of Interviewer's Voice Intonation"  
*Public Opinion Quarterly* 1977 (vol. 41-4)

\* 4 Patrick R. Cotter, Jeffrey Cohen, and Philip B. Coulter

1982 "Race-of-Interviewer Effects in Telephone Interviews"  
*Public Opinion Quarterly* 1982 (vol. 46-2)

\* 5 Michael F. Weeks and R. Paul Moore

1981 "Ethnicity-of-Interviewer Effects on Ethnic Respondents"  
*Public Opinion Quarterly* 1981 (vol. 45-2)

\* 6 Eleanor Singer, Martin R. Frankel, and Marc B. Glassman

1983 "The Effect of Interviewer Characteristics and Expectations on Response"  
*Public Opinion Quarterly* 1983 (vol. 47-1)